

ゼロから全国へ

経営情報学部 4年 フットサル部 部長 川口 達也

私の大学生活はフットサル部と共にあり、フットサル一色だった。そしてフットサル部は去年、全国大学フットサル選手権大会に初出場し、全国大会で第3位という成績を収めました。「石の上にも三年」というように、全国大会に出場するのに、とても時間がかかりました。しかし、その時間はかけがえのない時間だったと、引退する頃になって知りました。

私がこの大学に入学して1ヶ月が経つ頃、夢も、目標もない生活を送っていました。遅刻もせず大学に通い、黒板に書いてあることをノートに写し、1ヶ月間ただ授業に出席して帰る生活でした。刺激も無いごく普通の生活でした。

しかし、フットサル部が設立され、そこへ飛び込んだことにより、生涯の仲間と出会い、尊敬している監督と出会い、そして「フットサルで大学日本一になる」という目標が見つかったのです。生活が一変しました。刺激という言葉が皆無だった頃と比べ、フットサルをする毎日は刺激だらけでした。フットサル部に入部し1ヶ月が経った頃、私は3～4ヶ月程の月日が経ったと感じるほどの濃い日々を送っていました。

私はゴールキーパーというポジションをしていました。特別なポジションであり、難しいポジションです。このポジションのことを学ぶ為に、カテゴリーの高い社会人チームにも通い参加していました。

しかし、この頃から慢性的な疲労に苦しみました。その原因は、この頃とても厳しい生活リズムになっていたからでした。午後大学の授業が終わり、夕方から部の練習をした後、自転車で1時間移動し社会人の練習を夜12時までに行い、深夜2時頃帰宅し、1時間で家事を終わらせ、2時間だけ眠り、朝練習へと向かうという日もありました。1年間この様な生活をしていました。シュートを止められないことが悔しく、上手くなりたいという気持ちがこの頃の自分を苦しめていました。その結果学業でたくさん単位を落とすことになり、学業との両立ができない程練習をして疲れが溜まってしまい、鬱に近い状態まで自分を苦しめていました。少しずつ生活改善を行い、コンディションを気にしながら生活することでパフォーマンスが上がりました。そしてフットサル部も初年度ながら、東京都大学リーグ昇格を掴みました。このときの仲間と一緒に心の底から喜んだことは生涯忘れることは無いでしょう。私自身、この昇格から、とても大切な「何か」を得ました。

濃厚な1年間が終わると月日は早く感じるようになりました。そして、2年、3年、4年と年が経つごとにたくさんの新しい事も始まりました。新しい仲間やゼミの活動も始まりました。毎年、10～15人ほどの新1年生が入部してくれ、たくさんの後輩ができました。高校の部活では上級生は絶対的な存在で、イジるのなんて御法度です。しかし、フットサル部では後輩からイジられていました。良い意味で上下関係があまり無いのがうちの部活の良いところなのでしょう。コートの中でも、上下関係なく遠慮無しにすごいシュートを蹴ってきます。シュートを止めるのに苦労しました。僕より、質の高い能力、才能を兼ね備えた後輩たちにコートの中で刺激を受け、切磋琢磨し、負けたくないというこの気持ちを常に持つことでたくさん成長することができました。

2年生から始まった出原至道ゼミでは、フットサルに活かせるモノを作ろうと思い、スマートフォンのアプリを作っていました。そのアプリ

は、自分の試合を分析し、そのデータを記録してくれるもので、ゴールキーパー専用で作っていました。完成には至りませんでしたが、スポーツとまったく違う分野に飛び込んだ事で得るモノはたくさんありました。アプリの試作はいくつかできていたので、私たちが毎日利用しているiPhoneのアプリができるまでの工程がわかりました。高度なプログラミングスキルが必須だと思っていたのは、実は思い込みで、簡単なアプリは素人でも作れてしまう。しかし、複雑になっていくほど高度なプログラミングスキルが必要になってくるのです。私はプログラミングスキルをあまり身に付ける事ができませんでしたが、未知の世界に飛び込んだ事でたくさん知識、経験が積み、見聞が広がりました。

私が3年生のとき初めて東京都大学リーグで優勝をしました。私がフットサル部に入部した頃、東京都大学1部リーグに所属するチームはすべて格上の存在で、カテゴリーが2部リーグだった私達は戦う事すらできず憧れに近い存在でした。しかし、私が3年生のとき、多摩大学フットサル部は東京都大学リーグを無敗で優勝し頂点に立ちました。福角監督をようやく胴上げすることができました。その次の年も東京都大学リーグで優勝し連覇を達成する事ができました。

4年生になり、迎えた最後の大学フットサル選手権大会では、東京都大会を優勝し、関東大会では決勝で敗れたものの、関東第二枠で全国大会に出場する事ができました。函館で開催された全国大会では、新設された素晴らしいアリーナで戦う事ができ、初出場ながら第3位という成績を収める事ができました。大学日本一になる事は叶いませんでしたが、ここまでの挑戦はとても素晴らしいものでした。

そして、海外遠征でイタリアへ行きました。イタリア遠征はとても素晴らしい時間になりました。セリエAラツィオのトップチームと試合をし、国際大会では優勝することができました。

私は大学在学中にしか経験できない貴重な4年間を送りました。3年生では東京都大学リーグのMVPに選ばれとても嬉しかった事や、U-23 東京都選抜として長野オープン全国選抜大会で決勝のピッチに立ち、PK戦で敗れたというとても悔しい経験もしました。部長にもなり、部員やチームを陰でサポートした事。4年間で経験した全てが、今の私の財産になっています。

最後に、私の大学4年間に関わってくださった全ての方々へ。私は素晴らしい日々を送ることができました。心から感謝しています。

4年間ありがとうございました。



イタリア遠征 バルダッソ国際大会優勝

〈木村知義プロジェクトゼミ〉

メディア実践論の制作現場から

ウ～ン、ロケはむずかしい！
「私のリアル」に挑戦

経営情報学部 2年 岩野 元輝

「真面目だね、あんまり規則破ろうとしないし」
「変わってる。聞かれてることの斜め上だったりするし」
「あー、分かる。考え方がずれてるよね」
「あと集中しすぎると人の話ほとんど聞かないな。本とか読んでると特に」
ビデオカメラの向こうで「私」について好き勝手な話が続けている。
撮っている私は、時にイラッとくることも。しかし、そうか、友人たちにはそう映っていたのかとも思う。

昨年暮れ、高校時代の友人たちとの忘年会でのことだ。

秋学期からこのプロジェクトゼミに加わった私にとって、カメラを持ってロケへというのは結構大変だった。なのに、学生ジャーナルの記事まで書くことに。先生から執筆を声掛けがあって「あ、ハイ」と生返事。気がつけばパソコン画面とにらめっこ。このことを弟に話したら「兄貴って損な性格してるよね」と言われてしまった。

で、なんでこんなことを書いているかといえば、作品のテーマと大いにかかわりがあるからだ。

今回の私のテーマは「私のリアル」。つまり「自身の見直し」というか、他人から見た私はいったいどのように映っているのかを探るというものだ。きっかけはゼミで視た番組だった。「番組制作の一番の教科書は番組を視ること」というのが先生の口グセだ。撮影という実感が湧かず、なかなか制作に踏み出せない私たちに、「これでもか!」と様々な番組を見せるのだった。その一つに、一人の若いディレクターが自分は何もモテないのか、というテーマで撮ったドキュメントがあった。その若者は、最近知りあった人や学生時代の知人に自分がモテない理由を、遠回しに、時には恥も外聞もなく直球で聞いて、自分なりに納得する答えを得ようと悪戦苦闘していた。その時に、自身と他人では若者の像が違うと。そしてそれを自分に当てはめてみると、好きなこと、嫌いなこと、性格や趣味、将来やりたいこと……。考えるほどよくわからなくなっていった。この時点で頭痛と腹痛に悩まされることになる。よく、「自分のことは自分が一番わかっている」と言うが、あれは本当だろうか？そこで知人、友人から見た自分というものを探り下げてみようと思った。

踏み出せたのは冬休み前。プロジェクトゼミで使っている本格的なビデオカメラに触れてみるという体験からだった。カメラの重さ、ボタンの多さに圧倒されながら使い方を先輩から習っている私たちに、先生が一言。「じゃ、触ったことがない学生で校内ぐるっと回って、何か面白そうなもの撮ってこようか!」無茶ぶりだと思ったが、撮ってきた動画が結構いい評価で、これはもう是非色々撮ろう、作品を作ろうという流れができた。

そこで、高校の友人らとの忘年会。集まったのは10人。この企画について話してみたら問題なくOK。でも結果は……。いざカメラ向けるとよける奴、飲み食いにも夢中で後回しという奴、撮る前から問題だらけだ。ロケというのは本当に難しい。

で、冒頭の「君らにとって、私って何?」ということになるのだが、ほぼ全員が口にしたのは、「今も昔もなんというか純粋。色々知らな過ぎる」という謎の意見。「基本的に頼みごとを断らない」とも言われ、自分では断っているつもりなんだが、と首をひねる。多くは、自分では自覚のなかった私の「自画像」ばかりだった。

さて、こうなったら大学の友人にもインタビューしてみようかな、なんて。そんな感じで、なかなか楽しめた「初撮影の巻」であった。



カメラ操作を学んでさあ外へ(筆者・右)



鍋をつつきながら、ロケって大変

戻ってきた佐々木の“旅立ち”
～故郷と花火を見つめた私の二年～

経営情報学部 4年 佐々木 晨

「夏休み、私が大曲に滞在するのは、土地に暮らす人達からみればほんの『束の間』と言うべき短い時間だが、東京で暮らし、学びの日を重ねる私にとって、幼いころからの記憶を形づくった大曲は、そして夏の日の夜空を彩る大輪の花火は、私のこころや感性と切っても切れないものになっている……。大曲の『特別な一日』と普通の日、つまり『ハレ』と『ケ』を通して風土と人のつながりについて見つめてみたい」

これは「大曲の花火大会」をテーマにした企画と取り組み始めた2013年、「学生ジャーナル」に綴った私の思いだ。

カリキュラムの関係で履修できなかった1年を挟んで、4年生になった私は「メディア実践論」に戻ってきた。そして「未完」に終わっていた企画とふたたび取り組むことにした。そんなことが許される“ゆるさ”もこのプロジェクトゼミの良さだという叱られるかもしれないが、途中で放り投げてはダメだ、どんなことがあってもあきらめず最後までやり遂げて達成感を味わおう!というのは、いつも木村先生が強調していることでもあった。

夏休みを利用して帰省する母の故郷大仙市は、全国一の規模といわれる「大曲の花火大会」で知られている。この企画を考えた当時、まず歴史を調べた。文献上大曲に花火らしきものが初めて登場するのは、1800年代に菅江真澄が書いた地誌「月の出羽路」に描かれている民俗行事の挿絵だとされる。明治初めには「大曲村年中行事絵巻物」に花火の打ち上げの様子が登場する。米の産地、仙北平野の中心地で、雄物川につながる丸子川の川港の周辺に豪商が軒をつらねて街が形成されていた大曲では、まちの発展に伴い花火は行事や祭りには欠かせないものになったといわれている。大曲と仙北地域の市町村は合併して現在は大仙市となっている。

大曲の花火に目を向けることが、私にとっては故郷への「目覚め」となっていった。花火大会の2週間前にはすでに大仙市街のホテルや旅館はもちろん周辺の宿泊施設が全て埋まってしまふ。大会が迫るとさらに賑やかになり、屋台や出店の準備に追われる人々、家族や親戚、友達と花火を見るために集う人など、街は「花火」でなんともいえない雰囲気包まれる。午後の昼花火と夜行われる夜花火の2部にわたって花火が打ち上げられるのも面白い。昼は花火の音を楽しむものだという。観覧者はそれほど多くはないが、年配の人たちが集う。夜花火には、大曲内外の人が一斉に押し寄せる。花火を見るために河川敷の桟敷に向かう人々が道路を埋め尽くす光景は壮観だ。

この企画で一番苦労したのは、人々の表情を捉えることだった。花火を見ている最中や見終わった人々の表情は会場に向かう時とはまた違った生き生き感を醸し出していた。カメラを通して撮ることは難しいことだったが、生きた表情を捉え表現できたときの感動はとて大きかった。そして、年を重ねると花火のみならず地域の色々な良さがわかってくることも知った。発見の喜びを知ったといってもいいだろう。

こうして振り返ってみると、1年間のブランクを挟んではいるが、私の意識の中では「ひと続きの3年間」だったと言ってもいいような気がする。目を凝らして世の中を見つめ、足を使って現場に立つことの重要性を物凄く実感した「メディア実践論」の3年間だった。ここで学び取ったことは、就活の場でも生きたし、社会に出てからもきっと大きな力になるだろうと、今強く確信している。



花火を待つ人の熱気に包まれる河川敷



戻ってきた教室は、楽しい思い出

私が SGS で学んだ成長と変化の4年間

グローバルスタディーズ学部 (SGS) 4年 平野内 一樹

私が SGS で過ごした4年間は「成長」の4年間だと思う。それは SGS に通っていたからこそできた成長だと私は考える。SGS での私の変化についてここに書きたいと思う。

神奈川県立の高校を卒業したばかりの私は、今こうして学生ジャーナルを書くにふさわしい人間とは正反対だったと思う。高校時代はるくに勉強もせず、アルバイトと遊びを満喫していた。SGS を受験した理由は第一志望校に落ち、自宅から近い大学で AO 入試を受け付けているのは SGS しかなかったというのが正直な理由だ。このような中途半端な気持ちでいた私は、SGS に入学しても特に変わらず、大学には行くもののそれとなく適当に日々を過ごしていた。そんな私に大きな変化を与えたのは、1年生の春休みに行った1カ月のハワイ短期留学だ。ハワイでの生活は私にとって“初めて”が連続の日々だった。海外に一人で行くことが初めてで、不安を抱えて日本を発つたのを覚えている。AEP (英語集中教育) で勉強していたものの一人で見知らぬ土地で生活するには物足りない英語力であったが、その中で1カ月暮らした経験は私を大きく成長させた。ハワイでは様々な国の人や文化に触れることができ、私の視野は広がり、物事を柔軟に考えられるようになったと思う。また海外の育った国も環境も違う友達をたくさんつくることができた。特にホストファミリーとは今でも定期的に連絡を取っていて、留学から帰国後再びハワイに行った際にも一緒に食事をし、ホストブラザーの合唱祭鑑賞にも行った。ハワイでの経験のすべては海外留学をした人にしかできない特別な経験だと思う。

ハワイ留学で成長した私を更に成長させたのは、3年生の秋から始まったゼミ活動である。SGS にはゼミはなかったが、私が3年生になったとき秋学期からトライアルという形でゼミ活動がスタートするという話を聞いた。私はグローバルビジネスを専攻しているが、あえて自分の視野をさらに広げるために、観光について学ぶ堂下恵ゼミを選んだ。ゼミでは SGS のある藤沢市で一番の観光スポットである江ノ島のアンケート調査や分析を行っている。このアンケートは藤沢市観光協会から依頼を受け行っている調査で、英語でアンケートをつくり藤沢市観光協会の外国語ボランティアの方々と共に数回にわたり調査を実施し、卒業までに集計を行う。その後は後輩が分析や改善策の提案を行って行く予定だ。また私達のアンケート調査について高崎経済大学で行われた学生ポ

スターセッションで発表も行った。このような大きなプロジェクトに携わることで、SGS の代表として外部機関と連携しプロジェクトを行っているという意識が強くなり、責任感が身についたと思う。

ゼミでの活動はアンケート調査だけではない。中でも印象深くなおかつ私を成長させたのは、SGS の複数ゼミで行ったマカオ大学短期留学だ。内容としては、カジノリゾートが有名なマカオで統合型リゾートについて学ぶプログラムであった。このプログラムで私は学生リーダーという役割を担った。この役割を担って学べたことは、海外で団体行動の指揮を取る大変さだ。みんなが慣れない土地でストレスを感じているなかで、リーダーとして行動するのは日本にいる時以上に配慮が必要だからだ。またマカオ留学プログラムは私達が行った時が初めてのプログラムであったため、マカオに到着し大学スタッフが迎えに来るはずが予定の時間に来なかったり、プログラムの内容に変更があったり様々なトラブルがあった。そんな中引率教員と学生の間立ち学生メンバーをケアしながら過ごした経験はこれから先リーダーという立場を任された時にきっと役に立つことだろう。

SGS での経験は就職活動にも役立ったと思う。なぜなら就職活動には自分が大学生生活で何を体験したのか、経験から何を学ぼうと思ったかを話すからだ。幸い私には SGS 在学中の素晴らしい経験と、経験を採用担当者に話すコミュニケーション力を身につけていたおかげで複数企業から内定を獲得し、第一志望の企業からも内定を勝ち取ることができた。また私の就職活動の進め方を評価していただきキャリアサポーターズとして、後輩に就職活動のアドバイスをすることもできた。この経験も普通ではあまりできない経験であり、客観的に就職活動を見ることで私の就職活動の振り返りにもなる良い経験だったと思う。

こうして学生ジャーナルを書いていて今私が思う事は、SGS に入学できて本当によかったということだ。そして私は恵まれた環境で大学生活を送ることができたと思う。恵まれた環境で学ぶことができたのは、SGS の教職員の方々や友人、両親など私を支えてくれた人のおかげだと思う。私のそばで支えてくれた全ての人に感謝し、SGS で学んだ経験を活かし立派な社会人になりたいと思う。最後に学生ジャーナルにて私の経験について書くという機会を与えてくださりありがとうございます。



マカオ大学留学の学生メンバー集合写真



ハワイ大学留学プログラムの卒業パーティーにて

この一年を振り返って

27年度学生会会長 3年 福田 雅之

応援という目的の下、多摩大学で学ぶ学生同士でスポーツ観戦をしたいとの趣旨で昨年度の6月に001教室にて、学生会執行部主催「パブリックビューイング 男子サッカー日本代表の試合（日本 VS ギリシャ戦）」を大画面で中継した。好評につき今年度も7月2日、6日に121教室にて、なでしこ JAPAN 準決勝&決勝戦でパブリックビューイングを開催した。

カナダ大会が最後のワールドカップになると澤選手は明言しており、さらに日本は前回のワールドカップ（2011年）でアメリカをPKで下しており、なでしこ JAPAN には連覇がかかっていたため注目が集まった試合でもあった。

代表選手の活躍に121教室では、歓声が上がリ昨年にも増して一体感が生まれていた。このイベント企画は急遽決定し、限られた時間の中での実施であった。準備は出来たものの認知度が低く来場者数こそ少なかったが、初対面同士でも喜びを分かち合え、会場全体が一丸となって応援し、結果こそ準優勝ではあったが、充実したパブリックビューイングを開催できたと思っている。さらに教職員や教授の方々にも参加して頂き、次回開催への励みとなった。

パブリックビューイングの開催は2回とまだ実績は浅いが、学年の枠を超え、皆が気持ちを共にし、何かひとつの目的に向かう交流の場として、イベントを開催できればと思う。



4月に行われた新入生歓迎会



7月に行われたビアガーデン

27年度の学生会を振り返り

28年度学生会会長 1年 田倉 大雅

今年度は学生会と演劇サークルに所属してきました。学生会執行部では、学生同士の関わりや教授とのやり取りを通して企画やイベントをする事が大変だと思いました。当たり前ですが私自身ずっと見る立場だったので、より大変さを強く感じました。演劇サークルでは、劇の1つを打つ事の重要さや演者がどれ程大変なのか、また裏方がどんなに重要なのか、その劇1つにどんなに必要なのかを良く知ることが出来ました。

来年度は、流れを少し理解する事が出来たので、それこそ本腰を入れて本気で取り組んでいきたいと思います。演劇の方もさらにレベルアップして先輩方に追い付くように頑張り、後輩には今の先輩のようなお手本になれるように努力していこうと思います。勉強において、影響が出ないようにサークル活動していき、両立して今後に支障をきたさないようにしていきたいです。

これからも全力で学生会の活動をしていこうと思いますのでよろしくお願いします。

来年度開催イベントについて

書記 1年 河崎 光将

今年5月初旬に学生会執行部では「留学生交流会」のイベントを企画しています。

毎年多摩大へやってくる多くの留学生達。我々学生会は彼らが大学生活を送る上で日本人学生との関わりをと、このような行事を毎年実施してきました。内容としては毎年方向性を変えており、去年は日本伝統文化サークルによる紙漉ぎ体験や食事会を通して日本文化や日本人学生との交流を深めることができる良いイベントを開催できたと感じています。

来年度も同様に「留学生交流会」を実施する予定であり、留学生や海外留学や海外での活躍を考えている学生をはじめとし、多くの学生に参加していただけるよう取り組んでいきます。

またその他に学生会執行部では、今後も学生の取り組みや活動を積極的にサポートする方針です。多くの学生が学生会を有効に活用し、今後の大学生活をより満足できるような活動を実施していきたいと考えております。